

看護師基礎教育における

「シミュレーション教育」の取り組み

納谷 和誠

東京医療保健大学和歌山看護学部
看護学科成人看護学（急性期）助教

私は、12年間の臨床経験を経て大学教員となった。臨床での教育経験は、卒業1〜3年目看護師の指導や臨地実習指導であった。

看護師は、患者の状態に応じた看護援助を選択して実践する。そのためには、患者の状態を判断し援助を選択するための「知識」と実践するための「技術」が必要であり、臨床経験の浅い看護師がそれらの「知識」「技術」を獲得し、「実践できる」段階に到達するまでには多くの時間を必要とする。

例えば、手術を受けた高齢の患者が手術翌日に歩行する場面に関わったとする。経験が豊富な看護師であれば、体の調子や痛みなどの主観的な情報に加え、手術後の血

圧や脈拍、呼吸状態の経時的変化・水分出納バランス・手術創の状態などの必要な観察を行う。その上で、歩行が可能かを判断し、起立直後に血圧が低下するリスクや歩行時の血圧・呼吸状態などの変化、転倒などのリスクアセスメントを行い、最も患者に適した方法を選択し実践する。一方、経験の浅い看護師の場合は、観察が不足し実践まで行きつかないことも多い。しかし、「何が不足していたのか」を振り返り、不足部分を補完し再度実施することで、少しずつ「実践できる」段階に近づくことができる。そのため、OJTとOff-JTをうまく活用し、「実践」「評価」「学修・補完」を繰り返し行い、「知った分かった」知識を、実際の臨床現場で「使う・実践できる」段階まで到達できるような指導を心掛けていた。では、看護師基礎教育はどうだろう。

臨床現場と同様に、看護師基礎教育の場においても「質の高い人材の養成」が求められている。そのため、大学4年間で学ぶ多くの知識も、やはり「知る・分かる」段階から「使う・実践できる」段階により近づける必要があり、患者に接することができる臨地実習は非常に重要な機会である。しかし、臨地実習のほとんどは3年次に集中して

おり、そこで初めて1・2年次に習得した知識を看護実践に活用する。つまり、実習期間までに、1・2年次に習得した知識を「使う・実践できる」段階に近づける機会は少ない。さらに、看護学部では、看護技術・看護援助論から始まり、人体の解剖生理や疾患、治療・検査など多くの習得すべき知識がある。そのため、臨地実習以外にも、知識を「使う・実践できる」段階に近づけるための機会が必要であると考え、シミュレーション演習を取り入れた。演習は、2年次の急性期看護援助論内で行い、それまでの講義内容を基に演習シナリオを構成し「机上で学修した知識を統合し活用する」ことを目的とした。到達目標・演習内容は「学生の学修状況との整合性」を確認しながら検討し、「目標の達成に必要な知識・技術」を考え、事前学習として提示した。演習グループは、可能な限り少人数で編成し、全員が演習の実施を体験できるように配慮した。また、演習の実施者としての参加に加え、他学生グループの演習を客観的に観察し評価を行うことで、自発的な「気づき」を促進するとともに学修の必要性を感じてもらえるよう工夫した。

終了後、演習を行った学生からは、「実践に沿った演習

を行うことで、授業で学んだことがつなげた」「演習があつた方が分かりやすい」「知識が不足している部分を知れた」などの反応があつた。しかし、自分自身で演習内容を振り返ってみると、「到達目標・シナリオの設定は適切だったのか」「目標を達成させるためのファシリテーションは十分であったのか」と感じる。対象学生は、解剖生理や疾病治療論、フィジカルアセスメントなどを履修していたが、その中で何を学んだかの確認が十分ではなかった。演習を構成していく上で、学生が、どのような知識をどの程度習得できているかを十分に確認することは、「到達可能な目標を設定する上で重要なことである。また、学生のレイダネスを知ることが、目標達成に向けたファシリテーションにも欠かせないものであった。演習は、今年度も実施する予定である。昨年度の振り返りを生かし、より効果的な演習を目指し取り組んでいきたい。現在、演習は年間に1回しか実施できていないが、徐々に実施回数を増やし繰り返し行うことで、学生の実践能力を高めることができればと考えている。そして将来的には、模擬患者を活用した演習や臨床看護師の演習への参加など、より実践に近い演習を行っていきたい。

西南学院大学外国語学部 ・ 伊藤 彰浩「外国語学部長」

新たな伝統を築くエネルギー

1 はじめに

2020（令和2）年4月に西南学院大学の文学部は外国語学部生まれ変わる。本稿では文学部改組と外国語学部設置の経緯について報告する。

2 西南学院大学文学部の歴史

西南学院大学文学部の歴史は、1949年、新制大学として本学が設置された際の学芸学部に遡る。この学芸学部の中に英文学科を設置し、1951年に学芸学部を文学部と改称、1954年には文商学部を文学部と商学

部の2学部に分離した。1965年に文学部英文学科の「実務コース」を受け継ぎ、語学教育の充実を図るため、外国語学科を増設し、1969年には外国語学科に英語専攻とフランス語専攻の2専攻を開設した。これ以降、文学部に設置された他学科（神学科、児童教育学科、国際文学科）が、文学部から新たな学部として独立するなど組織の再編は進められてきたが、文学部の英文学科と外国語学科（英語専攻・フランス語専攻）による「2学科2専攻」の体制は、1969年以来、2020年3月までの半世紀にわたって維持されてきた。

この半世紀の間、英文学科、外国語学科英語専攻とフランス語専攻は、「英文（えいぶん）」「英専（えいせん）」、「仏専（ぶつせん）」の愛称で呼ばれ親しまれてきた。この「2学科2

専攻」の体制は、同じ文学部の中に共存する学科・専攻ではあるが、創設の経緯によって、事実上、3つの独立した組織として運営されており、互いに切磋琢磨し、時には競い合いながら独自性を発揮してきた。その一方で、専攻や学科の枠を超えた教員間、学生間の交流は限定的で、文学部としての一体感を見出しにくいといった問題もあった。

3 文学部から外国語学部へ

過去の文学部教授会の議事録を確認すると、これまで数回、文学部の将来について組織改編も含めた議論が行われた記録がある。しかし、組織の改編が協議されるたびに、3つの組織の独立性を保持したほうが良いという意見が多数を占め、変革の動きが生み出されることは一度もなかった。実際に、各組織の愛称も広く浸透し、世間の認知度も高い状況の中で、敢えて、伝統ある学科・専攻を新たな組織に変えようとする教員は多くはなかった。変革には相当な勇氣と決断力が必要となる。しかし、受験生の間で英文学科と英語専攻の違いが分かりにくい、フランス語専攻ならではのユニークな教育実践の内容や成果が十分に理解されてい

ないなど、今後の文学部の発展のために学部全体として取り組まなければならない課題は残されたままとなっていた。これは看過できない事実だった。

筆者が文学部長に就任した2017年4月に、文学部の将来について教授会で協議を開始し、同年5月に新旧主任6名を中心とした文学部将来構想委員会を設置した。そして、この委員会を文学部の将来を見据えて具体的な提案をする組織と位置付けた。教授会終了後に、全教員で文学部将来構想懇話会を開催する方針を打ち出し、文学部の将来について組織改編も含めた検討に入った。その理由は、次の3点にまとめられる。

①「学部組織の弾力化の必要性」学部をめぐる環境の変化を踏まえて組織体制を刷新し、学部の実情に適した名称に変更するとともに、学生に学科・専攻の垣根を越えた横断的な学びを促し、「語学の西南」という社会からの期待に応えたい

②「カリキュラムの充実と体系化の必要性」入試制度改革への対応や、より高度な外国語運用能力を備えた人材養成が求められることを見据え、学科・専攻の統合を目指すし、カリキュラムの充実を図りたい

③「大学設置基準への対応」半世紀以上にわたって組織

の改編を行うことがなかったため、「学科」を最小単位と定めた現行の大学設置基準(第4条及び第18条)に適合しない状態になっている。速やかにこの設置基準に準拠した組織体制へと改編したい

ここで重要なのは、組織改編の目的を伝統の否定ではなく、文学部の伝統を継承し、さらなる発展を促す契機とした点である。そして、新しい学部名称を「外国語学部」とする方針が2017年10月に承認された。

4 外国語学部の組織とカリキュラムの構築

3つの独立した組織をどのように改編すべきか。これまで文学部の学生からは、同じ文学部内でも他学科や他専攻で開講されている科目が履修しにくい状態に対する不満があった。同時に、これは学生間、教員間の交流機会が少ないことも意味していた。

1971(昭和46)年、全国の大学の中で最も早い時期に海外派遣留学制度の設置を実現した西南学院大学は、地球上のすべての大陸に協定校を持ち、多言語・多文化圏への留学を志す学生も多い。そのような学生たちに大学での

学びを豊かなものにしてもらうためには、「学習の対象となる言語(英語・フランス語)」や「学びの領域(文学・文化、言語学、社会学、コミュニケーション学)」によって限定されたカリキュラムではなく、むしろ外国語学部として提供できる全ての専門科目を学生に提示し、学生が主体性をもって履修科目の決定を行うシステムを採用する必要があった。そこで、「2学科2専攻」の枠内に限定されていた専門科目を学部全体で提供することが可能かどうか検討に入った。英文学科と英語専攻で提供されている専門科目の中で同一の名称や内容を含む科目をマッピングし、文学部内の英語系専門科目の科目名、科目数、内容の傾向を把握し整理した。その上で、外国語学部において必要不可欠と思われる科目を厳選し、最終的には英語系科目数の50%を削減した。一方、フランス語専攻の科目を確認したところ、ゼロからフランス語を学ぶ学習者を想定したカリキュラムであり、順次性と体系的性において十分なレベルであった。

外国語学部の新しいカリキュラム作成を進めていく中で、隣の学科専攻のカリキュラムの現状や独自の取り組みについて情報を共有できたことは、組織改編への道筋に確かな手応えを与えてくれた。しかし、半世紀にわたって3つに分

断されていた「組織の壁」(教員間の見えない「心の壁」)は予想以上に堅固で、その「壁」を少しずつ削り落とししていくために、「文学部版ワールドカフェ」を開催し、所属する学科・専攻ではなく文学部のメンバーとして、建設的なアイデアを出し合う努力を重ねた。カリキュラムの一元化が最終決定するまで、教員間で激しい議論が行われた。今では懐かしくも感じる当時の激しいやり取りは、研究対象の言語や専門領域の違いを乗り越えて、学生のため、社会のため、そして文学部の卒業生たちのために、誰もが誇れる「新生」文学部Ⅱ「外国語学部」の設置を実現するために必要であった、と今は自信を持って言える。

2017(平成29)年10月には2学科2専攻から1学科(外国語学科)への「統合」に踏み切る方向性が文学部教授会で承認された。そこで、最終的に以下の5点が決定された。

①手厚い初年次教育を実践する
②1年次は、英語とフランス語の学習を集中して行う期間とする

③充実した初年次教育を実現するため「基礎演習」と「導入演習」の科目を設置する

④アカデミックアドバイザー制度により、入学した日から卒

業まで学生個人に対してきめの細かいサポートを提供する
⑤専門科目は、英語研究科目群、フランス語研究科目群、グローバルコミュニケーションスタディーズ(GCS)科目群の3つに分類する。GCS科目群は、英語またはフランス語のみで授業を実施する

外国語学部に入學した学生には、1年次前期に履修する「基礎演習」の担当教員がアカデミックアドバイザーとなり、大学での学びや留学に関する助言を与える。さらに学生は「導入演習」の受講を通して、外国語学部で展開される外国語学の様々な領域について基礎的な知識を得ることで、2年次以降の自分の学びの方向性について考える機会を持つことになる。

こうして、従来の学科や専攻の「壁」に分類されることのない、「外国語学部」という大きな水槽の中を回遊する学生たちは、成長段階や環境変化に応じて生息場所を移動する魚のように、立体的な広がりのある水の中—カリキュラム—を自由に泳ぎ回ることが可能になった。しかし、目的もなく大きな水槽の中を泳ぐだけでは、学びのコアを意識しづらい。学生一人ひとりが回遊に必要な感覚や能力を身につけて、自分の位置や移動方向を決める必要がある。そこで1年次終了時に、前述の3つの科目群に分類された専門科目を

どのように選択し履修するかを検討できるように、5種類の履修モデルを示すことにした。この履修モデルは、いわば水槽の中に生み出される緩やかな「水流」である。自らが頼りにする「水流」の選択は、アカデミックアドバイザーのサポートを得ながら、学生自身が決定することになる。

5 外国語学部独自の留学プログラムの設置

外国語学部独自の取り組みとして何をすべきか。そして、その取り組みをカリキュラムにどう位置づけるべきか。外国語学部である以上、全学的な取り組みである海外派遣留学制度以外にも、実現したい学びに寄与する学部独自の留学プログラムが必要である。

西南学院大学の国際センター、言語教育センターから提供された標準型言語テストのデータを統計的に分析し、その結果に基づいて筆者は次の提案を行った。

① 1年次後期(第2セメスター)の経験が以後の大学生活における学びへの意識を変える(筆者はこの傾向を「第2セメスター問題」と呼称している)。すなわち1年次後期に、学びの目的と意義を再認識させる経験と仕組みが必要となる

② 全学の海外派遣留学制度以外に、外国語学部独自の留学プログラムを設置する。その留学プログラムは、外国語学(Foreign Language Studies)の学びの方向性に基いた名称がつけられ、教育プログラムとして実施されるべきである。約2年間の検討の結果、次の5つの留学プログラム(FLSシリーズ)が設置されることとなった。

① FLS Gateway(異文化体験) 夏期休暇中にベトナムで実施される海外フィールドワーク研修。外国語学の「入り口」(Gateway)を経験させるプログラム。初めて海外での異文化体験を経験する学生を対象とし、自分がどのような学びに興味と関心を持っているか考える機会を提供する。事前、事後の授業も展開され単位が取得できる科目として実施される

② FLS Honors(1年次後期留学) 1年次後期に米国とフランスで実施される約4か月間の語学集中トレーニングプログラム。米国、英国、フランスの協定校と米国のELSセンターの協力により、1年次後期に取得すべき英語、フランス語の単位を上限16単位まで単位互換制度により取得可能。外国語学部の将来を担う「名誉ある学生」(Honors)を育成する。このプログラムは学生支援機構(JASSO)の「2020年度海外留学支援制度(協定派

遣)学生交流創成タイプ(タイプA)に採択された

③FLS-Ambassadors(成績優秀者を協定校の特別プログラムに「大使」(ambassador)として派遣)成績上位の学生を選抜し、協定校と構築した協働プログラム(現地でのインターンシップ等)に参加し、自分の知識と能力を他者のため、社会のために躍動させ、西南学院大学外国語学部の学生であることに對して自信と誇りを持たせる

④FLS-Endeavor(米国ノースアラバマ大学(UNA)とのダブルディグリープログラム)西南学院大学の提携校であるUNAとのダブルディグリープログラム。2つの学士号取得を「一貫した努力」(endeavor)の成果と位置づける。ダブルディグリー取得までの道のりは特別な「履修モデル」として提案され、3年次後期に選抜された学生は、4年次の後期より1年間現地で学び、帰国後、西南学院大学とUNAの2つの学士号を取得する

⑤FLS-Insight@TJFS(東京外国語大学との国内留学プログラム)2019年12月16日(月)に西南学院大学は東京外国語大学と大学間包括連携に関する協定を締結した。この協定に基づく最初の試みとして、2020年度からFLS-Gatewayへの参加者に対して、東京外国語大

学よりベトナム語の遠隔授業が提供される。現地でのフィールドワークを経験する外国語学部の学生がベトナム語の初級レベルを学習したうえで現地に赴くことが可能となる。さらに外国語学部の第1期生が3年生となる2022年度より、最大2名の学生を半年もしくは1年間、東京外国語大学へ派遣する。この国内留学制度は、外国語学の学びを東京外国語大学(TJFS)で「深化」(insight)させる目的として実施される

6 外国語学部の ミッション・ステートメント

これまで文学部改組と外国語学部設置の経緯について報告した。本稿のまとめとして、「西南学院大学外国語学部のミッション・ステートメント」を紹介したい。

「希望をもち、主体的に学び、自分の言葉を使って他者とつながろうとする意識と行動力を育みたい。それを実現するのが、文学部の伝統を受け継ぐ外国語学部の使命である。」

文学部の伝統を忘れることなく、外国語学部の使命を果たそう。それこそが、我々の意識に変革をもたらし、「新たな伝統を築くエネルギー」になるのだから。